

Glocal Tenri



12

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.19 No.12 December 2018

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
緩和ケアと赤衣
／高見宇造 1
- ・ 「元初まりの話」に登場する動物たち (35)
「大蛇」について②
／佐藤孝則 2
- ・ 日系移民の歴史にみる天理教の北米伝道の様相 (24)
太平洋戦争と北米伝道②
／尾上貴行 3
- ・ 伝道と翻訳—受容と変容の“はざま”で— (14)
初期仏教に見る「ことば」の諸相③
／成田道広 4
- ・ 日本語教育と海外伝道 (5)
日本語教育で使われる教科書について③
／大内泰夫 5
- ・ キルケゴールで読み解く 21 世紀 (3)
万人向けでない単独者の生涯、万人に向けた単独者の果実
／金子 昭 6
- ・ 遺跡からのメッセージ (41)
日欧考古学交流の一里塚—置田雅昭先生を偲ぶ—
／桑原久男 7
- ・ コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ関係試論 (22)
キンバングスム教会
／森 洋明 8
- ・ コロンビアへの扉—ラテンアメリカの価値観と教えの伝播— (新連載)
ラテンアメリカという語彙
／清水直太郎 9
- ・ ヴァチカン便り (35)
死刑は廃止すべきか
／山口英雄 10
- ・ 思索・試案・私案
手話は言語～聾教育における手話～②
／八木三郎 11
- ・ 図書紹介 (109)
『柳田国男の話』
／金子 昭 12
- ・ 平成 30 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ (4)
第 5 講：59「まつり」
／澤井治郎 13
- ・ English Summary 14
- ・ おやさと研究所ニュース 15
新連載執筆のねらいと執筆者紹介／第 315 回研究報告会 (高見宇造)／第 316 回研究報告会 (金子昭)／平成 30 年度「教学と現代」／平成 30 年度公開教学講座／新刊紹介

巻頭言

緩和ケアと赤衣

おやさと研究所長 高見宇造 Uzo Takami

今秋、大谷大学で開かれた日本医療社会福祉学会大会に出席した。今回のテーマは、「『聴く』ことの再考—ソーシャルワークにおける今日の意味—」である。緩和ケアにおけるソーシャルワークに関心が高まるなか、スピリチュアルペイン、例えばガン末期患者の不安や恐れ、魂の叫びをどのように「聴く」のか、それが討論の焦点となった。もちろん、この問題は私たち信仰者も避けて通れない関心事である。平成 14 年には WHO が、「緩和ケアとは、生命を脅かす病に関連する問題に直面している患者とその家族の QOL を、痛みやその他の身体的・心理社会的・スピリチュアルな問題を早期に見出し的確に評価を行い対応することで、苦痛を予防し和らげることを通して向上させるアプローチである」と定義している。また 18 年には「がん対策基本法」が成立し、「ガンと診断された時からの緩和ケア」が推奨されている。

学会後、私は『緩和ケアと時間—私の考える精神腫瘍学—』(小森康永、金剛出版)を求めて読んだが、「緩和ケア」をアメリカでは palliative care と呼ぶことを知った。palliative とは、『研究社 新英和大辞典』(第 6 版、平成 14 年)によれば、「(病気の一時的) 緩和剤」の意味である。他の辞典でもほぼ同じであったが、さらにその語源を調べると興味深いことが分かった。これは後期ラテン語から借入された言葉で、『古典ラテン語辞典』(大学書林、平成 17 年)によれば、pallium すなわち、「外出着、外套を着た者」という意味であった。palliative は、痛みを和らげ緩和する意であるが、その語源は、自らが着ている上着を脱ぎ病者に掛ける行為を意味していた。もちろん上着を脱げば自身は寒くなるが、それを承知の上で敢えて病者に掛けることである。

私はその語源に深く感じ入ったが、信仰者としては『稿本天理教教祖伝逸話篇』所収の「赤衣」の逸話が思い浮かんだ。

例えば 67 話「かわいそうに」がある。この逸話は、幼少から身体が弱く、持病の胃病が昂じた拙冬鶴松は明治 12 年、16 歳で、危篤状態となり、医者も匙を投げてしまった。しかし知人の導きで、両親に付き添われ、戸板に乗り、初めておどば帰りをする。教祖にお目通りすると、教祖は、「かわいそうに」と、仰せになって、御自身が召しておられた赤の肌襦袢を脱いで、鶴松の頭からお着せになった。この時、鶴松は教祖の御肌着の温みを身に感じると同時に、夜の明けたような心地がしたという。難病も、それ以来薄紙をはぐように快方に向かい、やがて全快した鶴松は、「今も尚、その温みが忘れられない」と語り継いだというお話である。

教祖はなぜ鶴松に赤衣を掛けられたのか。それは恐らく、戸板に乗ってまで会いに来た鶴松を、「かわいそうに救ってやりたい」と思われた上からの行いであったと思う。結果、鶴松の病状は回復するが、鶴松にとっては「今も尚、その温みが忘れられない」と語ったように、教祖の赤衣を通して感じた温みが難病に立ち向かう気力となったことは言うまでもない。私は、ここに信仰者として「緩和ケア」の原点を学ぶことができるように思う。教祖が赤衣を掛けられたことは、まさに palliative care の象徴的な行為として受け止められるのではないかと。緩和ケアという、時代が抱える深刻な問題であっても教祖の教えにその意味理解の糸口を見つけられるのである。

また一方、「おさしづ」では高齢から死を迎える病者の家族に対し、「心にかりもの・かしの理も伝え、……さあ〜長き〜道すがらの理も、聞かさにゃならん。心に治めさ〜ねばならん。……今までに生れ更わり出更わりの理も聞いたる処、皆んな十分に楽々と聞かさにゃならん。」(22・7・29)と言われている。もちろん、これも教祖の赤衣を着せたような温もりある言葉で伝えなければということになる。